



前回までのところで、家族から社会のケアの移行を考えてきましたが、ゆたか福祉会の調査結果も含め、それらは都市部での暮らしが念頭にあったと思います。今回は、さまざまな面で生活環境も異なる中山間地域における家族の高齢化問題について考えてみたいと思います。

今回の舞台は、山陰の小京都とも言われる山口県萩市です。萩市は、歴史的な街並みと自然が共存するともきれいな町です。明治維新の立役者や政治家なども多く輩出する土地であり、訪れたことがある方も多いと思います。観光地を少し離れると、海側と山側のそれぞれの地域での日常生活が営まれています。

萩市は、平成の大合併で1市2町4村が合併して広域となり、車で縦断すると1時間ほどかかり、過疎の問題を抱えた地域も多くあります。福祉事業所の多くは旧萩市に集中しており、日常的に支援を利用すると、交通手段などの問題が生じる地域も多くあります。

今回の執筆に際し、障害児者の親の会に参加されている父母5名と地元の支援学校の教員1名に集まっていただき、座談会をお願いしました(実施は、2020年3月)。

高齢期を迎えた 障害者と家族

老いる権利の確立をめざして

第9回 中山間地域における 家族の高齢化問題



佛教大学
田中智子

たなか ともこ／専門は障害者のいる家族に生じる生活問題、障害者福祉援助の専門性。著書に『知的障害者家族の貧困—家族に依存するケア』(法律文化社)、編著に『いっしょにね!!—障がいのある子もいない子も大人たちも輝くために』(クリエイツかもがわ)など。

父と娘で支え合って暮らす

座談会とあわせてインタビューにもご協力いただいた萩市在住の柴田帝治さん(62歳)は、5年前に妻が急に亡くなられ、今は重症心身障害がある娘のかなえさん(32歳)とその姉の3人暮らしです。

以前は、かなえさんのケアは全面的に妻が担っていましたが、帝治さんも入浴介助や学校行事への参加など、できる限り一緒に子育てをしてきたとのこと。その妻が亡くなったとき、かなえさんがグループホームや入所施設を利用するという選択肢はなく、自分が家で見るのが当たり前の選択だったと振り返ります。

今も現役でフルタイムのお仕事をされている帝治さん。出勤後と帰宅前になかなえさんが一人になる時間があるので、ヘルパーを利用しています。また月に数回は土曜日にも仕事があるので、金曜から土曜にかけてショートステイを利用しています。

数カ月前、誤嚥が続くことでかなえさんはPTEG(PEG)を装着する手術を受け、今は、そこから食事をとっています。医療

的ケアが加わったことで、これまで利用していた通所施設に併設されていたショートステイが利用できなくなりました。

そこで、医療的ケアに対応してくれる病院に一時入院という形で利用をされたのですが、送迎のために仕事を半日休む必要がありました。その後は、ヘルパーさんに介護タクシーを使って行ってもらうことになりましたが、その交通費が心配と帝治さんは話します。

幼少期は、療育を求めて高速道路を使って海を渡り、福岡県北九州市小倉まで2時間程度かけて通っていたそうです。現在も歯科受診のために4カ月に1回、

小倉まで通っています。

最近、帝治さんの腰痛が悪化してきており、できる限り在宅でケアしたいという希望はあるけど、そろそろ限界が近づいているかなという不安が時折よぎると言います。かなえさんの医療的ケアのこともあり、近くで入所できる施設があるか不安もあり、今後、遠方の施設見学も予定されているとのことでした。

将来、自分に介護が必要になったら、施設入所を考えたとのこと。妻が元気だった頃は家庭菜園を楽しんでいましたが、いまはかなえさんも経口摂取が叶わないということで「誰も食べてくれない



とても仲の良い柴田さん親子